

社会技術研究開発事業
スモールスタート研究開発実施終了報告書

「SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」

「オールマイノリティプロジェクト：発達障害者を始め
とするマイノリティが社会的孤立・孤独に陥らない
認知行動療法を用いた社会ネットワークづくり」

研究開発期間 2022 年（令和 4 年）10 月～2024 年（令和 6 年）3 月

大島 郁葉

千葉大学 子どものこころの発達教育研究センター 教授

目次

1. プロジェクトの達成目標.....	2
1-1. 研究開発課題の全体構想.....	2
1-2. スモールスタート期間に達成すべき事項.....	3
1-3. 本プロジェクトの研究・クエスチョン.....	4
1-4. ロジックモデル.....	6
2. 研究開発の実施内容.....	7
2-1. 研究開発実施体制の構成図.....	7
2-2. 実施項目・スモールスタート期間の研究開発の流れ.....	7
2-3. 実施内容.....	9
3. 研究開発結果・成果.....	14
3-1. スモールスタート期間全体としての成果.....	14
3-2. 実施項目毎の結果・成果の詳細.....	17
3-3. プロジェクトの研究・クエスチョンについて明らかになったこと.....	26
3-4. 今後の成果の活用・展開に向けた状況.....	27
4. 研究開発の実施体制.....	30
4-1. 研究開発実施者.....	30
4-2. 研究開発の協力者・関与者.....	32
5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など.....	33
5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など.....	33
5-2. 論文発表.....	35
5-3. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）.....	36
5-4. 新聞/TV 報道・投稿、受賞など.....	36
5-5. 特許出願.....	37
6. その他（任意）.....	37

1. プロジェクトの達成目標

1-1. 研究開発課題の全体構想

本プロジェクトは、現状の定型発達者（マジョリティ）を前提とした社会に対する、発達障害者（マイノリティ）の価値観への顧慮と理解の促進をすることを目的とする。そのために、発達障害者の周囲の支援者や家族の「マイクロアグレッション」(Sue ら, 2010) という、日常的な言動や環境を通じた軽蔑をさし、発信者側の意図にかかわらず、敵意・軽蔑・否定的なメッセージを周縁化された集団・人に伝える態度を変容させることを最終目標とする。具体的には、①発達障害者の社会的孤立・孤独の生成維持メカニズムの仮説検証および発達障害者に対するマイクロアグレッションの分類モデルを確立し、②機械学習と認知行動療法（CBT）の技法を組み合わせた「オールマイノリティアプリ」を開発し、③発達障害者に対する支援者や家族の「マイクロアグレッション」の解消方法として、個別の認知・行動的変容を促す提案までを体系的に行う。さらに、映像作家や漫画家らとコラボレーションした形でマイクロアグレッションの啓発動画やプロダクトを開発しアプリ内の心理教育として用いる。このような一連の社会実装活動を継続することで、定型発達者が、マイノリティ（発達障害者）の価値観の包摂を通して社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組みの提案を行う。本プロジェクトは、発達障害に限らないさまざまなマイノリティ問題と、これに関連する社会的孤立・孤独問題への新しい対処方略となり得ることが独創的・先駆的で、価値がある。

スモールスタート期間での目標

- 1 年目：社会的孤立・孤独の生成維持メカニズムについて、児童思春期以降の発達障害者および成人の定型発達者を対象とする大規模社会調査（発達障害者 1,000 人程度、定型発達者 1,000 人程度）を施行し、「発達障害者の社会的孤立・孤独の生成プロセスと維持モデル」の解明、および「(発達障害者に対する) マイクロアグレッション分類モデル」を作成する。マイクロアグレッション解消のための支援ライブラリを作成し、先行研究の知見をもとに「マイクロアグレッション分類モデル」とのマッチングを行う。
- 2 年目：マイクロアグレッション解消のために支援場面ごとに有効な支援法である「オールマイノリティアプリ」のプロトタイプとなる認知行動療法（Cognitive Behavioral Therapy: 以下、CBT）の構成を作り上げる。同プログラム構成をもとにプログラムの試作を完成させ、パイロット研究として、2 施設（千葉大学附属病院精神科・千葉大学教育学部）にて試験実装する。この時期は、アプリ使用と併用して、定期的に CBT セラピストがビデオ会議システム等を用いて有人でのサポートを行い、セラピストからのフィードバックもデータ化する。また、スモールスタート時の研究成果をもとに、映像作家および漫画家ら協働し、発達障害者への偏見の持たれ方や、マイクロアグレッションに関するシナリオ等を作成する。なお、春にオールマイノリティプロジェクトの広報を目的としたキックオフシ

ンポジウムを千葉大学にてハイブリッド方式で行い、発達障害やインクルーシブ教育の専門家を招聘しシンポジウムを開く。また、啓発グループによるマイクロアグレッションやマイノリティ・マジョリティの気づきを向上させる短編動画や漫画等を、SNS等を通し公開することで、幅広い層へ啓発活動を行う。

本格研究期間での目標

3年目：オールマイノリティアプリ（試作版）を複数の施設（千葉県発達障害者支援センター・相模女子大学・信州大学・(株)LITALICO、みらいの居場所等）に実装し、定期的にフォロー及び評価を行う（試験終了後、6か月から1年程度での施行予定）。この間には、CBTセラピストは有人ではなく、オートメーション化する。社会実装グループは、アプリでは測定できない環境型マイクロアグレッションや、発達障害者当事者からのメッセージを伝える映像作品および漫画等を作成する。

4年目：アプリの実装開始後1年程度を経た施設に関しては、最終評価を行い、データをもとに支援ライブラリの最適化を行い、「オールマイノリティアプリ」の完成とする【PoC】。社会実装グループは映像作品および漫画等を完成させる予定であるが、本プログラムで得られた知見から、本プロジェクトで作成した作品に対してもマイクロアグレッション検出ツールを適用して妥当性の検出をし、コンテンツの最適化に活用する。その後、協力施設らに配信を開始する。

5年目：5年目の前半にすべての施設の最終データを取り終える。効果検証として、啓発（介入）の前後で、マイクロアグレッション行動測定尺度の得点が減少するかを検証するなど、マイクロアグレッションの減少を定量的に解析する。またマイクロアグレッションの啓発作品をアプリ内の心理教育マテリアルとして使用し、その後、企業研修や教員研修用として商品化し、支援に関わる施設等に流通させる。その後、千葉大学教育学部、千葉市教育委員会の協力を得て、教員研修（特別支援教育等、発達障害に関する研修）の一環として試験的に本アプリを使用してもらい、教員への使用においてもエビデンスを構築する。

1・2. スモールスタート期間に達成すべき事項

目標 1. 定型発達者（マジョリティ）と発達障害者（マイノリティ）の価値観の差異および発

達障害者の社会的孤立・孤独の生成維持メカニズムを明らかにし、マイクロアグレッションの分類モデルを完成させる：発達障害者および定型発達者を対象とする大規模調査（児童思春期以降の発達障害者・成人の定型発達者それぞれ 1,000 人程度）を通じて、どのような社会的・人口学的・心理学的変数が発達障害者に対するマイクロアグレッションを分類するかを明らかにする。

2. 発達障害者の支援者に対して、マイクロアグレッションを軽減させる個別性の高い認知行動療法の技法を用いたプログラムの作成と、マイクロアグレッション分類モデルに基づくアプリを開発し、効率よくマイクロアグレッションの可視化と理解、およびコントロール化を可能とする：マイクロアグレッション解消のための CBT の原理に基づく支援プログラムを、アプリをベースとしたマテリアルとして作成し、どのような支援法が最も効率よくマイクロアグレッションを軽減させるかを明らかにした上で、オールマイノリティアプリのプロトタイプを作成する。

- 成果**
1. 定型発達者と発達障害者の価値観の差異からくる、定型発達者からのマイクロアグレッションが可視化された結果、それがどの程度、発達障害者の社会的孤立・孤独と関連があるかが明らかとなる。そのため、エビデンスに基づくオールマイノリティアプリの開発が可能となる。
 2. オールマイノリティアプリを含む、発達障害者の支援者および家族をターゲットとした「マイクロアグレッション減少プログラム」のプロトタイプが完成し、次の社会実装（多様な施設において本プログラムを実施し、効果を検証する）のフェーズに移行可能となる。

1-3. 本プロジェクトのリサーチ・クエスチョン

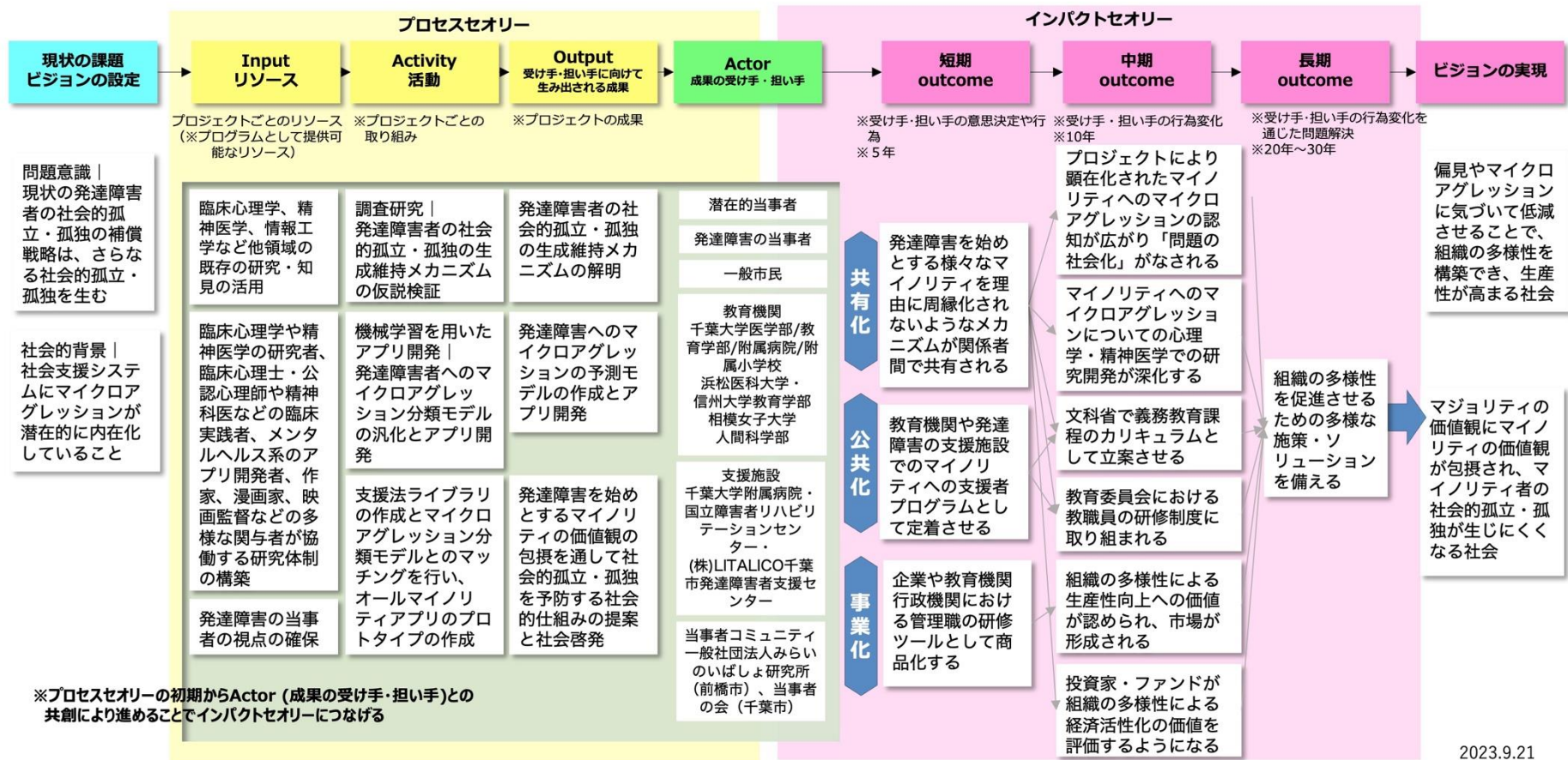
本プロジェクトにおけるリサーチ・クエスチョンを以下のように定めた。

- Q1. 本邦における発達障害者の社会的孤立・孤独の生成・維持のシステムはどのようなメカニズムがあるのか？
- Q2. 発達障害（特に自閉スペクトラム症）当事者のマイクロアグレッションの体験の実態やその特徴は何か？
- Q3. 本プロジェクトで開発する、発達障害者への支援者および家族に向けた、よりよい支援の

ためのマイクロアグレッションを減少させることを狙ったアプリである「オールマイノリティアプリ」の効果はあるのか？

1-4. ロジックモデル

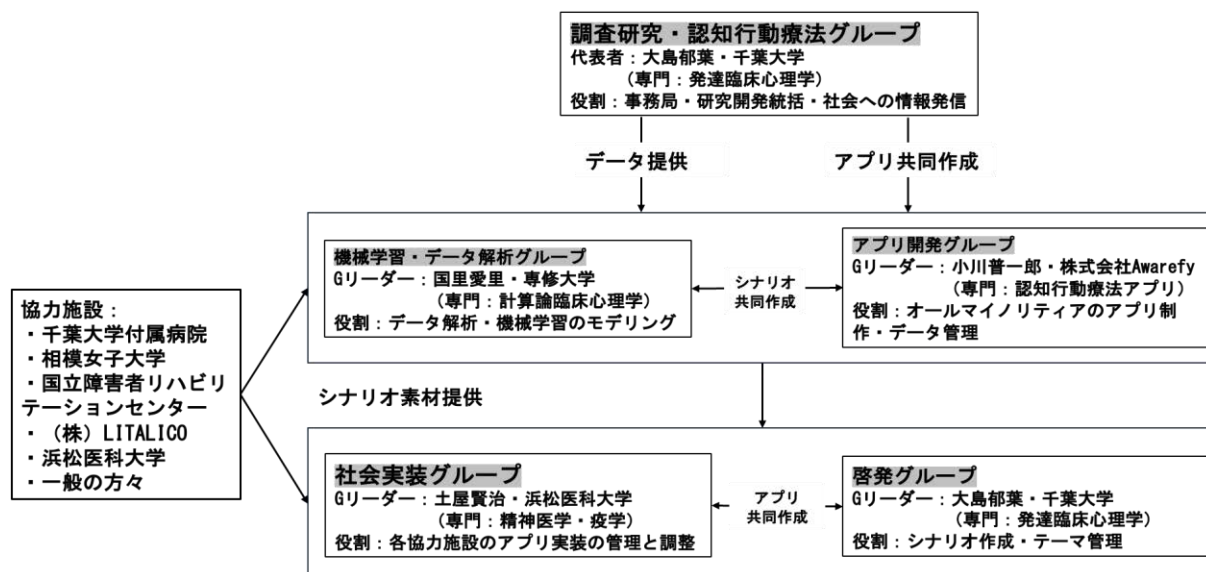
SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築） 「オールマイノリティプロジェクト：発達障害を始めとするマイノリティが 社会的孤立・孤独に陥らない認知行動療法を用いた社会ネットワークづくり」ロジックモデル



2023.9.21

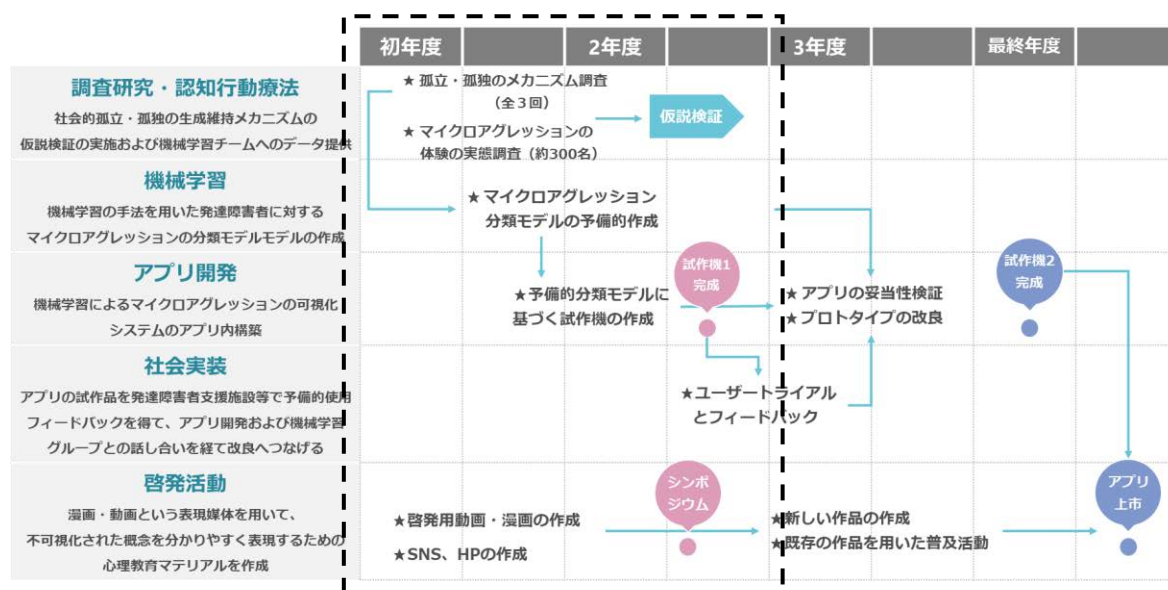
2. 研究開発の実施内容

2-1. 研究開発実施体制の構成図



2-2. 実施項目・スモールスタート期間の研究開発の流れ

< 研究開発の全体の流れ（点線枠がスモールスタート期間） >



項目1：発達障害者への社会的孤独・孤立へのプロセスに関する大規模調査

期間：令和4年10月～令和6年3月

実施者：大島 郁葉（千葉大学子どものこころの発達教育研究センター・教授）
 管 思清（千葉大学子どものこころの発達教育研究センター・特任研究員）
 高橋 史（信州大学教育学部・准教授）

対象：ウェブ調査において、研究参加同意のとれた以下の参加者を対象とする。

【定型発達者】過去に精神疾患などの診断がなく発達障害に関するスクリーニング検査で閾値以下の18歳以上39歳以下の男女1000人。背景情報のほか、価値観に関する調査（自由記述）、マイクロアグレッション尺度、発達障害へのマイクロアグレッションをしたかもしれない体験（自由記述）、孤独感に関する尺度などを実施する。

【発達障害者】過去に発達障害の診断がある10歳以上39歳以下の男女1000人。背景情報のほか、価値観に関する調査（自由記述）、社会的孤立感尺度、社会的カモフラージュ尺度、発達障害に関するマイクロアグレッションを受けたかもしれない体験（自由記述）、孤独感に関する尺度を実施する。

解析：児童思春期（10 - 18 歳）、成人期前期（18 - 39 歳）の発達障害者、18 から 39 歳の定型発達者についてそれぞれ、価値観・偏見・孤独感などについて群間差、モデルの適合度等を検討する。また、本調査で集めたデータを機械学習グループに提供し、マイクロアグレッション分類モデル作成に用いる。

■項目 2：機械学習：「(発達障害者に対する) マイクロアグレッション分類モデル」の作成

期間：令和 4 年 10 月～令和 6 年 3 月

実施者：国里 愛彦（専修大学人間科学部・教授）

実施内容：大規模調査で得られたデータから、機械学習の手法を用いて、（1）定型発達者のマイクロアグレッション分類モデル、（2）発達障害者の社会的孤立予測モデル（児童思春期版・成人期前期版）を作成する。分類／予測モデルの作成にあたり、複数の機械学習のモデル（例えば、勾配ブースティング決定木、SVM、CNN、Random forest など）を検討した上で、もっとも分類性能の良いモデルを選択して、「マイクロアグレッション分類モデル」、「社会的孤立分類モデル」とする。そのモデルを発達障害者の当事者のフィードバックを得ながら完成させる。

■項目 3：アプリ開発：支援法ライブラリの作成とマイクロアグレッション分類モデルとのマッチングを行い、オールマイノリティアプリのプロトタイプの作成

期間：令和 5 年 8 月～令和 6 年 3 月

実施者：大島 郁葉（千葉大学子どものこころの発達教育研究センター・教授）

高階 光梨（千葉大学 子どものこころの発達教育研究センター・特任研究員）

小川 晋一郎（株式会社 Awarefy・代表取締役）

対象：発達障害者の支援者および保護者、教育者

実施内容：調査研究班が作成する支援法ライブラリと機械学習グループの作成するマイクロアグレッション分類モデルを利用し、マイクロアグレッション解消を社会実装するための手法としてセミナー形式を選択した。そのためアプリ開発グループでは、セミナーで上記分類モデルやマイクロアグレッションを理解するための動画、自身のマジョリティ性を実感するためのアンケート等のワークをウェブ上で行えるような技術選定を行い（python のフレームワークである Streamlit を利用）、そのプロトタイプ開発を行う。

■項目 4：社会実装（予備的フェーズ）

期間：令和 5 年 11 月～令和 6 年 3 月

実施者：土屋 賢治（浜松医科大学子どもこころの発達研究センター・特任教授）

加藤 健生（浜松医科大学子どもこころの発達研究センター・特任研究員）

対象：発達障害者の支援者および保護者、教育者

項目 1 で明らかになった発達障害者へのマイクロアグレッションの実態をもとに、当事者グループ、教師、心理士、精神科医、その他の支援者といった幅広い支援職と意見交換を行う。そのようにすることで、発達障害に特異的なマイクロアグレッションを明らかにする。また、本研究開発の発展がマイノリティ者における社会的孤立・孤独の減少にどこまで貢献しうるのかについての洞察を深めるとともに、社会全般（とくにマイノリティ者のグループ）との共創的な関係性を発展させ、次のフェーズにおける課題を探る。また、千葉大学教育学部教員養成課程および千葉大学附属病院精神科にて、アプリの予備的試験を試行し、データ解析を行い、本試験に向けた調整を行う。

2-3. 実施内容

2-3-1. 項目 1：発達障害者への社会的孤独・孤立へのプロセスに関する大規模調査

目的：「発達障害者の社会的孤立・孤独の生成プロセスと維持モデル」の解明

期間：令和 4 年 10 月～令和 6 年 3 月

実施者：「調査研究・認知行動療法グループ」

対象：18 歳から 36 歳の発達障害者

実施内容：本調査は、「マイクロアグレッション（図 1）が、発達障害者の社会的受容体験を阻

害し、その結果、社会的孤立・孤独に影響を与える」ということを仮説として開始した。R4年度は予算状況を鑑みて、対象者数の適正な数を計算し直し、発達障害者のべ1200名を対象とした。なお、3時点での縦断データを取るためひとりにつき3回、回答を得るという調査モデルを立てた。調査を実施するために、実施機関である千葉大学にて倫理審査を行い、承認を得た。またマイクロアグレッション尺度の日本語版著作権と承諾を原著者に依頼し、許可を得た。

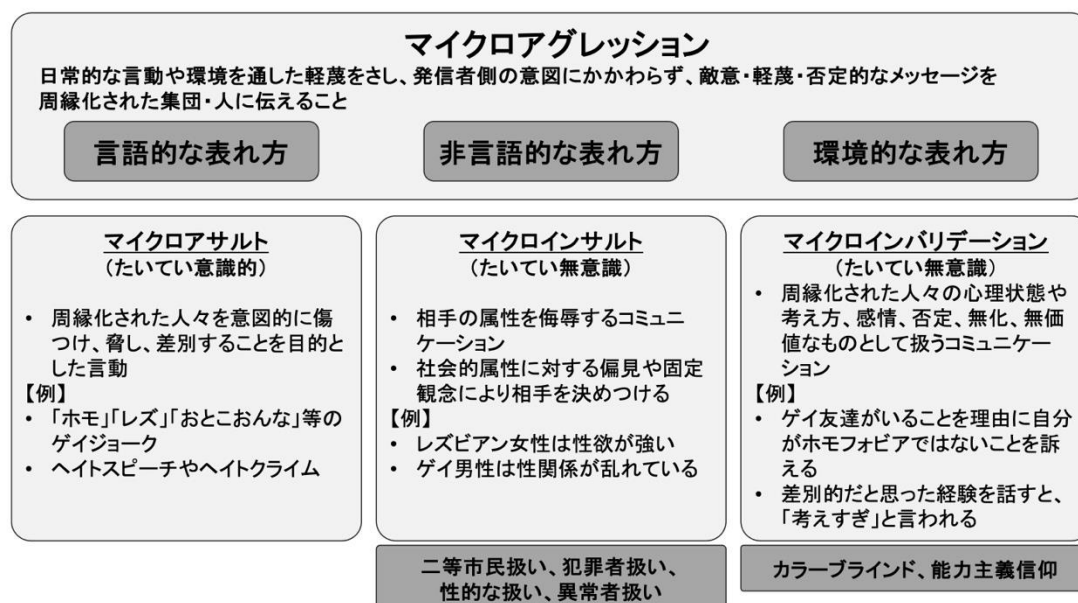


図1 マイクロアグレッションの定義と分類

R5年の6月に実施した調査では、背景情報のほか、自閉スペクトラム症の受容に関する調査（自由記述）を含む、社会的孤立感尺度、社会的カモフラージュ尺度、および発達障害に関するマイクロアグレッションを受けたかもしれない体験（自由記述）のデータを取得した。現在は、発達障害についてのマイクロアグレッション、自閉スペクトラム症の受容に対する経験、孤独感などについて、交差遅延モデルでの解析を進め、プロセスモデルの解明を進めている。なお、解析の途中結果を「結果」の欄に記載した。

2-3-2. 項目2：「(発達障害者に対する) マイクロアグレッション分類モデル」の作成

目的：「(発達障害者に対する) マイクロアグレッション分類モデル」の作成

期間：令和4年10月～令和6年3月

実施者：「機械学習グループ」

対象：18 歳から 36 歳の発達障害者

実施内容：大規模調査で得られたデータから、機械学習の手法を用いて、定型発達者のマイクロアグレッション分類モデルを作成する。当初は予測モデルの作成を予定していたが、機械学習のメリットを活用するために、得られたテキストデータからマイクロアグレッション分類モデルを作成する方法に変更となった。分類モデルの作成にあたり、複数の機械学習のモデル（例えば、勾配ブースティング決定木、SVM、CNN、Random forest など）を検討した上で、もっとも分類性能の良いモデルを選択して「マイクロアグレッション分類モデル」とする。そのモデルを発達障害者の当事者のフィードバックを得ながら完成させる。

R4 年度はマイクロアグレッションを含んだ文章（テキストデータ）に対してマイクロアグレッションのどのタイプに当てはまるのか分類するモデルについて予備的検討を行った。Yahoo!知恵袋のデータを用いて、テキストデータからマイクロアグレッションに関する潜在的なトピックを抽出する相関トピックモデル（Correlated Topic Model: CTM）を検討した。しかし、相関トピックモデルは探索的な分類には適しているが、マイクロアグレッションには文脈依存性があり、相関トピックモデルだけでは、その判別は難しいという限界点も明らかになった。

R5 年度は、R4 年度の結果を踏まえて、マイクロアグレッションの文脈依存性を考慮し、得られたテキストデータに対して発達障害の当事者性をもった研究者によってマイクロアグレッションかどうかアノテーションを行った。そのアノテーション付きデータに対して、自然言語処理モデルである BERT（Bidirectional Encoder Representations from Transformers）を用いた分類を行った。BERT によるマイクロアグレッションかどうかの分類をした上で、どのタイプのマイクロアグレッションか検討するために、相関トピックモデルを用いた。

2-3-3. 項目 3：支援法ライブラリの作成とマイクロアグレッション分類モデルとのマッチングを行い、オールマイノリティアプリのプロトタイプを作成

目的：マイクロアグレッション解消のために支援場面ごとに有効な支援法である「オールマイノリティアプリ」のプロトタイプとなる CBT の構成を作り上げる

期間：令和 5 年 8 月～令和 6 年 3 月

実施者：「調査研究・認知行動療法グループ」「アプリ開発グループ」

対象：発達障害者等の支援者（医師・心理士・発達臨床心理士・教師など）

実施内容：調査研究班が作成する支援法ライブラリと機械学習グループの作成するマイクロアグレッション分類モデルを利用し、マイクロアグレッション解消を社会実装するための手法としてセミナー形式を選択した。そのためアプリ開発グループでは、セミナーで上記分類モデルやマイクロアグレッションを理解するための動画、自身のマジョリティ性を実感するためのアンケート等のワークをウェブ上で行えるような技術選定を行い（今回は python のフレームワークである Streamlit を利用した）、そのプロトタイプ開発を行った（図2）。

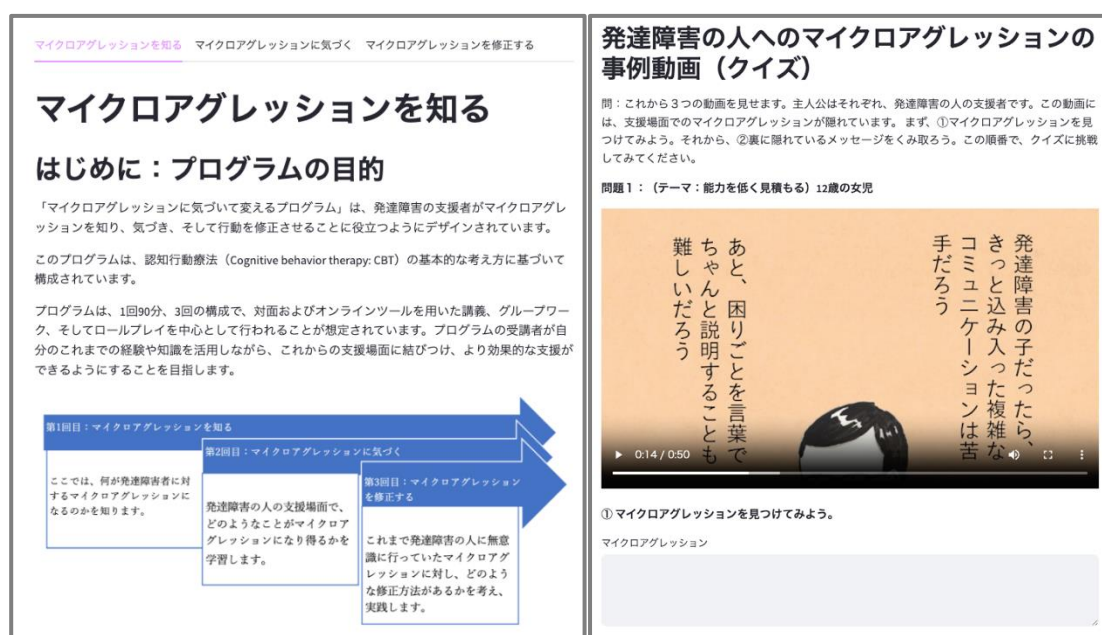


図2 マイクロアグレッション低減プログラムのアプリの一部

2-3-4. 項目4：啓発グループおよび社会実装グループ（予備的フェーズ）

目的：マイクロアグレッションやマイノリティ・マジョリティの気づきを社会で向上させる

期間：令和4年10月～令和6年3月

実施者：「啓発グループ」

対象：一般集団、発達障害者、発達障害者の保護者や支援者等

実施内容：発達障害者の価値観とマイクロアグレッション予防の啓発を目的とした、当事者へのインタビュー動画を作成し、キックオフシンポジウムで上映を行った。また、当事者参加型で、研究者・当事者・漫画家が共同し、マイノリティの価値観とマイクロアグレッション予防の啓発をテーマとした作品を作成し、SNS等を用いて拡散した（図3・4）。これらによって、現代社

会においてもなお意識化されていないマイクロアグレッションを可視化し、マイノリティの周縁化を改善および予防のための啓発活動を行った。



図3 オールマイノリティプロジェクトで公開している動画



図4 オールマイノリティプロジェクトのSNSアカウントとマイクロアグレッション啓発漫画

3. 研究開発結果・成果

3-1. スモールスタート期間全体としての成果

本プロジェクトでは、マイノリティである発達障害者が周縁化されないインクルーシブな社会を創ることの実践へ向けて、発達障害者の社会的孤立・孤独を明らかにし、その要因を解消するために、発達障害者の支援者および家族に、発達障害者に対するマイクロアグレッションを軽減するアプリを内包したプログラムを提供し、定型発達者へ発達障害者へのマイクロアグレッションを減らすことで、発達障害者が社会により顧慮されることを目的とした。以下に、スモールスタート期間全体の成果を記す。具体的には、スモールスタート期間における研究開発計画として下記の3つの実施項目およびKPIを設定した。

【実施項目 A】

●内容：発達障害者の社会的孤立・孤独に至るプロセスを複数の心理社会的因子から同定する。また発達障害者の社会的孤立・孤独につながる日常生活におけるマイクロアグレッションの特徴に関して、自由記述式アンケート調査にて分析を行い、発達障害者に特異的なマイクロアグレッションを明らかにさせる。

●KPI①：2023年5月までに、「障害に対するマイクロアグレッション尺度日本語版」の妥当性と信頼性を担保し、開発する。その後、(株) LITALICO のメールマガジン購読している発達障害者の縦断データのべ1200名を取得し、「障害に対するマイクロアグレッション尺度日本語版」「自閉症の社会的受容尺度日本語版」「UCLA 孤独感尺度」「マイクロアグレッションの体験（自由記述）」等のアンケート調査を完了する。予測としては、障害に対するマイクロアグレッションが独立変数として、発達障害の受け入れに負の影響を与え、発達障害者の社会的孤立・孤独を促進する。また、発達障害者のマイクロアグレッションの体験の特徴に対しては、他の障害と比較して、共通する形容もあるが、「発達障害は能力が低い」などといった発達障害特有の形容が見られると予測した。

●目標の達成状況：2023年5月までに、「障害に対するマイクロアグレッション尺度日本語版」の妥当性と信頼性を担保し、開発することができた。マイクロアグレッション尺度の開発後、(株) LITALICO のメールマガジン購読している発達障害者の縦断データを取得したが、対象者が限定的であることや縦断調査であるために調査期間が短く設定されていたなどの理由から約900

名となった。当初の予定よりも少なくなったが、統計学的検定には耐えうる数であることから、再調査は行わなかった。3か月間（月に1回の間隔で実施）で、「障害に対するマイクロアグレッション尺度日本語版」「自閉症の社会的受容尺度日本語版」「UCLA 孤独感尺度」「マイクロアグレッションの体験（自由記述）」等のアンケート調査を完了した。大規模調査の結果、障害に対するマイクロアグレッションが独立変数であり、媒介変数として発達障害の受け入れに負の影響を与え、その結果、発達障害者の社会的孤立・孤独を促進していることが明らかとなった。また、発達障害者のマイクロアグレッションの体験の特徴に対しては、他の障害と比較して、「発達障害者の能力の過大評価（天才が多い）」や「発達障害は誰でもある（過度の一般化）」などが明らかとなった。これらの結果をもって、実施項目 B に移行した。サンプル数は計画よりも少なくなったものの、KPI①として設定した目標は概ね達成したと言える。

【実施項目 B】

●**内容**：発達障害者のマイクロアグレッションの体験を自然言語処理し、マイクロアグレッションを自動検出できるアプリを開発する

●**KPI②**：2023 年 9 月末までに、大規模調査で得られたテキストデータを機械学習の手法を用いて、定型発達者のマイクロアグレッション分類モデルを作成するためのアノテーションを完了させる。並行して、分類モデルの作成にあたり、複数の機械学習のモデル（例えば、勾配ブースティング決定木、SVM、CNN、Random forest など）を検討した上で、もっとも分類性能の良いモデルを選択する。2023 年 12 月にアプリ試作機を完成させ、実施項目 C の支援者向けマイクロアグレッション低減プログラムの中で本アプリを試用できる状態にすることを目標とする。

●**目標の達成状況**：R4 年度は Yahoo!知恵袋のデータを用いて、テキストデータからマイクロアグレッションに関する潜在的なトピックを抽出する相関トピックモデル（correlated topic model: CTM）を検討した。しかし、相関トピックモデルは探索的な分類には適しているが、マイクロアグレッションには文脈依存性があり、相関トピックモデルだけでは、その判別は難しいという限界点も明らかになった。そこで、2023 年 5 月に、330 名の発達障害者から記載してもらった「マイクロアグレッションの体験」の 1713 個のテキストを 856 個と 857 個に分割し、それぞれについて発達障害の当事者を含む発達障害の専門家、マイクロアグレッションの専門家ら 3 名が独立にアノテーションを実施した。2023 年 9 月末日の段階で、マイクロアグレッション

に関する文書のアノテーションは終了し、現在まで機械学習を進めている。具体的には、そのアノテーション付きデータに対して、自然言語処理モデルである BERT (Bidirectional Encoder Representations from Transformers)を用いた分類を行った。BERT によるマイクロアグレッションかどうかの分類をした上で、どのタイプのマイクロアグレッションか検討するために、相関トピックモデルを用いた。2023 年 12 月までにアプリ試作機を完成させる必要があるが、そのための準備は概ね順調に進んでおり、KPI②として設定した目標は概ね達成していると言える。

【実施項目 C】

●**内容**：発達障害者へのマイクロアグレッションを減らすための、支援者や家族を対象とした、「マイクロアグレッションに気づいて変えるプログラム」を開発し、プレミナリーに社会実装する

●**KPI③**：スティグマ低減プログラム等の先行研究を基に、マイクロアグレッション低減プログラムを発達障害の専門家およびウェブコンテンツの専門家、アニメーション作家等と話し合い、作成する。1 回 90 分、3 回オンラインで実施する構成とし、スモールスタート期間においては有人でのセラピスト 1-2 名が参加する。また、施行前後において、マイクロアグレッション（加害者側）の尺度で定量的に効果を分析する。

●**目標の達成状況**：効果測定に使用する加害者側のマイクロアグレッション行動を測定する尺度である MIMS-P (Mental Illness Microaggression Scale-Perpetrator version) は原著者の許可を得て日本語版の作成が完了している。また、マイクロアグレッション低減プログラム（「マイクロアグレッションに気づいて変えるプログラム」）は、プログラムの骨子および構成要素は検討済みである。マイクロアグレッションを体験するアニメーション動画や、マイクロアグレッション検出アプリなど体験型とするための具体的なマテリアルも 80%程度完成しており、それぞれ 2023 年 12 月までの完成を目指す。実施施設として予定している千葉県発達障害者支援センターおよび千葉大学教育学部とは 2024 年 1 月の開始に向けて話し合いを進めている。測定のための尺度の整備、プログラムの開発、実施施設の確保のいずれの準備も概ね順調に進んでおり、KPI③として設定した目標は達成していると言える。

【総括】

実施項目 A から C までは、当初の予定通り概ねプロジェクトは進行している。本プロジェク

トの研究開発要素である「①社会的孤立・孤独メカニズム理解」には、発達障害者へのマイクロアグレッションの概念化を行うことに成功した。「②人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手法（指標等）の開発」に関しては、マイクロアグレッションの分類化と自然言語処理を行い、アプリの試作品が完成した。さらに、「社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描出」および「③社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み」に関しては、「発達障害者の支援者や家族に対するマイクロアグレッション低減プログラム（認知行動療法）」もおおむね完成した。今後は予定通り、発達障害者の周囲の人の認知的変容を促すという社会実装のフェーズに入る予定である。このように、マイクロアグレッションを検出し、それをマイノリティ属性の人の周囲の人がプログラムを受けるというプロセスはかなり新奇性が高く、マイノリティ・マジョリティの垣根を解消する持続可能な方法になると言える。

3-2. 実施項目毎の結果・成果の詳細

3-2-1. 大規模調査

① 「発達障害者の社会的孤立・孤独の生成プロセスと維持モデル」の解明

結果：本調査においては、のべ 1200 名の発達障害者を目標としたが、3 回（3 か月）の縦断データでの有効回答数は 777 名であった。男性が 108 名、女性が 120 名で、比率に差異はなかつ

表 1 対象者のデモグラフィックデータ

性別	男性	108	
	女性	120	
	ノンバイナリー	17	
	その他の性別	7	
	回答しない	7	
年齢（SD）		29.98 (5.54)	
自閉症の診断年齢（SD）		22.53 (8.56)	
診断名	自閉スペクトラム症	189	73.0
	広汎性発達障害	80	30.9
	小児自閉症	3	1.2
	非定型自閉症	1	0.4
	レット症候群	0	
	他の小児期崩壊症候群	0	
	精神遅滞（知的障害）および常同運動に関連した過動	3	1.2
	性障害		
	アスペルガー症候群	62	23.9
	他の広汎性発達障害	6	2.3
	特定不能の広汎性発達障害	2	0.8
	わからない	8	3.1
	その他	25	9.7
就労状況	就労	125	48.3
	未就労	116	44.8
	その他	18	6.9
合計就業年数		6.25	
その他の精神疾患の併存		180	69.5
通院中		239	92.3

た。発達障害の中でも、自閉スペクトラム症が 73%と広範囲を占めた。また、就労状況は、半数が就労し、半数が未就労であった。対象者のデモグラフィックデータを表 1 に記載した。

また、今回の解析の一部においては媒介分析を実施した（図 4）。その結果、社会からのマイクロアグレッションは、他者からの受容を受けることに負の影響があり、その他者からの受容がない結果、社会的孤立・孤独が増すという因果関係が明らかになった。今回の分析結果の一部は、社会からのマイクロアグレッションは逃れようのない、発達障害が社会的孤立・孤独に影響を与える独立変数であることが示唆された。そのため、我々の本調査の仮説である「マイクロアグレッションが、発達障害者の社会的受容体験を阻害し、その結果、社会的孤立・孤独に影響を与える」ということが立証された（図 5）。本研究の成果は、International Society for Autism Research (INSAR)にて発表内容が採択され、発表前だった。本研究結果は現在まで論文執筆中である。

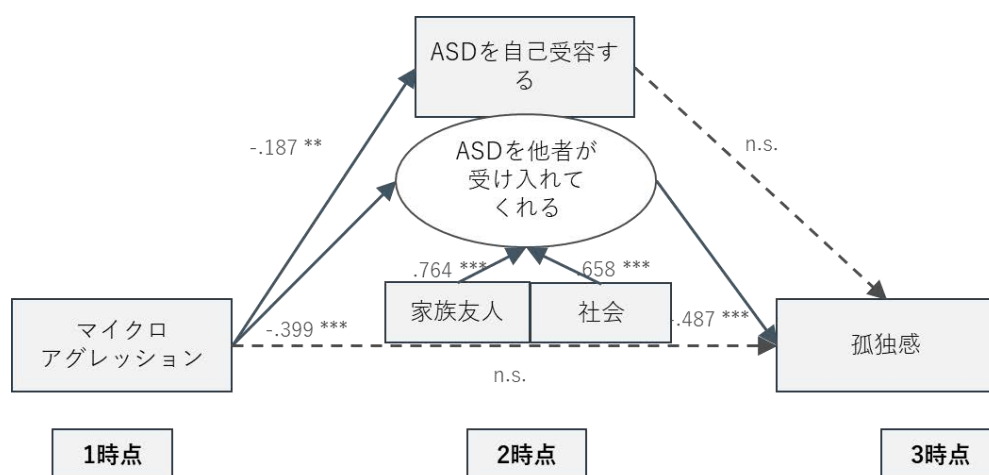


図 4 3 時点での媒介分析

② 発達障害者が体験したマイクロアグレッションの実態調査

大規模調査の第 1 回目において、参加者にマイクロアグレッションの体験についての自由記述を求めた。有効回答は 30.32 歳（±5.6 歳）の男女その他 330 名から得られた（表 2）。現在まで再帰主題分析にて分析中であるが、現在までにおおむね、表 3 のような結果となった。具体的なテーマは、「抜きんでた能力をもとめられる」「障害はない（過小評価）とされる」「能力全般を低く見積もられる」「発達障害者は価値がないと世の中から捉えられている」などであった。本研究の成果は、International Society for Autism Research (INSAR)にて 2024 年 2 月に採択され、2024 年度の国際発表が決まっている。

表2 アンケート調査回答者の属性

アンケート回答者 330名		
現在の年齢（平均 / 標準偏差）		30.12歳 (5.60)
診断年齢（平均 / 標準偏差）		22.74歳 (8.65)
自認ジェンダー（人/％）		
	女性	153人 (46.36%)
	男性	137人 (41.52%)
	その他*	40人 (12.12%)
教育歴（人/％）		
	中学または高校卒業	95人 (28.79%)
	短大・専門・大学卒業	214人 (64.85%)
	大学院以上卒業	21人 (6.36%)
ASD以外の診断(有)(人/％)		112人 (33.94%)

注）*トランスジェンダー、ノンバイナリー、クエスチョニング、共有したくない。

表3 発達障害者へのマイクロアグレッションの再帰主題分析

発達障害者のマイクロアグレッションの体験の実態調査 結果②

マイクロアグレッション体験の実態

拔きでた能力を求められる

- ・ 9歳の時祖母に、障害はギフトの仲間だからと言われた
- ・ 友だちに、自閉症の人ってすごい能力があるんだよね？って言われた

障害は「ない」とされる

- ・ 友人と話している時 友人が私たぶんADHDだから～
- ・ 自分にも障害的なものがあるからさと言われた

能力を低く見積もられる

- ・ 発達障害の診断後、心理カウンセラーの自分に対する接し方が突然変わった。
- ・ 高校のカウンセラーに発達障害の診断を受けたことを伝えたと、話し方が幼児に話しかけるようになった

発達障害は恥ずかしい、要らない

- ・ 就活ナビの広告の中の女性が背中を向けて親指を立てていた。発達障害者は顔を出してはいけないのか。
- ・ フェイスブックの広告 「発達障害者やストレス耐性が低い人、いわゆる社会不適合者を炙り出すテスト(多くの企業が採用)」

隠されたメッセージ

すごい能力をもっていない
発達障害者は価値がない

発達障害はみんなあるので、
あなたも努力すべき

発達障害者は
コミュニケーションの
能力がない

発達障害者はいらぬ
恥ずかしい存在

3-2-2. 項目2：機械学習：「(発達障害者に対する) マイクロアグレッション分類モデル」の作成の結果

大規模調査で得られた発達障害当事者による 1713 個のテキストデータを用いて、マイクロアグレッションの分類モデルを作成することを目的とした。1713 個のテキストには、マイクロア

グレッションが含まれているものとそうでないものがあるため、発達障害当事者を含む発達障害の専門家とマイクロアグレッションの専門家らがアノテーションを行った。手順としては、1713 個のテキストを 856 個と 857 個に分割し、それぞれに対して 3 名が独立にアノテーションを実施した。以下の表のように、3 名のラベルが完全に一致したのが 65.5%、3 名のうち 2 名のラベルが一致したのが 30.1%であり、全テキストの内 95.6%のデータを分類することができた（表 4）。分割したそれぞれのテキスト群で一致率は大きく異ならず、専門家によるアノテーションが適切に実施されていることが示された。

表 4 アノテーションの一致度について

3 人が付与したラベルの状況	データ数	全データ数に対する比率 (%)
ラベルが全て一致	1122	65.5
多数決によってラベルが決定	515	30.1
ラベルが全て異なる	76	4.4
合計	1713	100

アノテーションの結果、1713 個のテキストデータは、「マイクロアグレッションである」729 テキスト、「マイクロアグレッションではない」842 テキスト、「どちらともいえない」142 テキストに分類できた。これらのアノテーション付きデータに対して、自然言語処理モデルである BERT (Bidirectional Encoder Representations from Transformers) を用いて分類の学習を行った。なお、「どちらともいえない」とラベルづけされた 142 テキストは、「マイクロアグレッションではない」に含めて学習を行った。学習の評価にあたって、10 分割交差検証を行ったところ、精度(Accuracy)は 0.86 となり、十分な精度を示した。以下の混同行列が示すように、「マイクロアグレッションではない」とアノテーションされたテキスト (True labels の not micro aggression) に対して、85%の確率で「マイクロアグレッションではない」と判別できた (Predicted labels の not micro aggression)。一方、「マイクロアグレッションである」とアノテーションされたテキスト (True labels の micro aggression) に対して、87%確率で「マイクロアグレッションである」と判別できた (Predicted labels の micro aggression) (図 5)。

BERT には入力されたデータを判別する際の重要とみなす単語に重みづけを行う注意機構があり、その可視化も可能になる。本研究でも、注意機構を用いた attention map による可視化が可能となった。

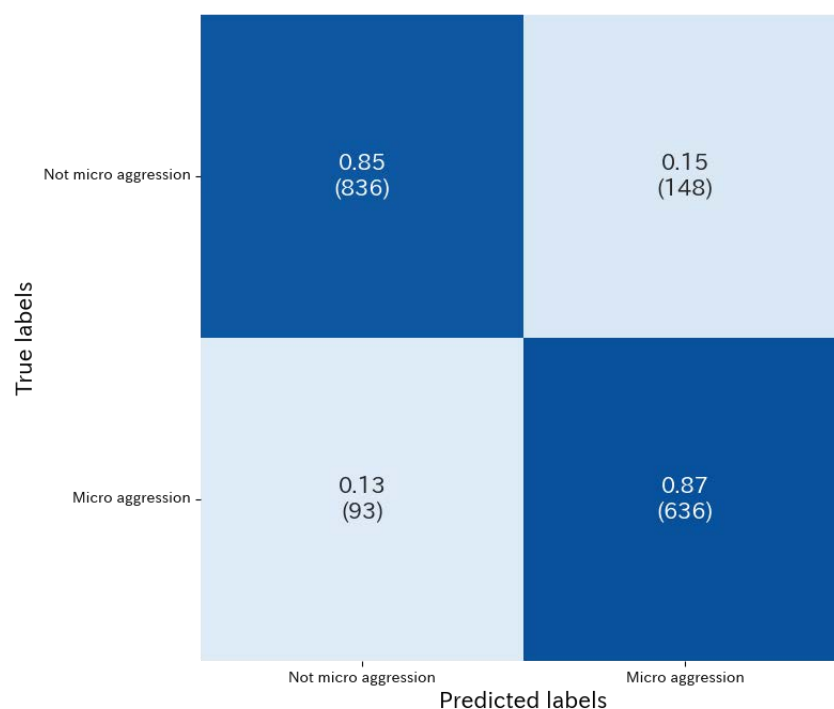


図 5 BERT による学習の 10 分割交差検証の混合行列

2023 年 12 月までにアプリ試作機を完成させる必要があるが、上記のようにそのための準備は概ね順調に進んでおり、KPI②として設定した目標は概ね達成していると言える。

3-2-3. 項目 3：支援法ライブラリの作成とマイクロアグレッション分類モデルとのマッチングを行い、オールマイノリティアプリのプロトタイプを作成する

全体での議論を踏まえて、初期の対象利用者を「支援者」に限定し、支援者向けのセミナー形式で提供することとなった。また、機械学習グループが作成する「マイクロアグレッション分類モデル」は Streamlit という Python ライブラリを用いることが決まった。これらの前提条件を踏まえてスモールスタート時での技術選定を行った。

まずは、スマートフォンアプリで公開するか、ウェブアプリで公開するか、またウェブアプリであれば常時公開するか、限定公開にするかを整理した。

表 5 アプリ試作についてのディスカッション概要

種類		Pros	Cons
スマートフォンアプリ		一度ダウンロードすると継続利用しやすい	- ダウンロードが必要 - 開発コストはウェブより高い - ストア経由で修正申請が必要
ウェブアプリ	常時公開	- 誰でも利用可能 - スマホアプリと比べて修正容易	- 継続利用はスマホアプリよりしづらい - 常時公開だと文脈を伝えづらく意図せぬ議論を呼ぶ可能性
	限定公開	- セミナーに参加する人のみ閲覧 - 常時公開と比べてコストは安い	影響範囲が限定的

表 5 のような整理を踏まえ、対象利用者を「支援者」に絞った前提条件を加味して、影響範囲は限定的であってもリスクコントロールしやすくコストも抑えられるウェブアプリの限定公開版で開発することとした。

ウェブアプリの技術選定は前述の通り機械学習グループが **Streamlit** を使用していることを踏まえ、**Streamlit** がそのまま利用できること、サーバー設置のコストを考えなくて良いこと、セミナー利用時に参加者が入力したデータを蓄積しやすいこと等を加味し、下記のような構造にした。

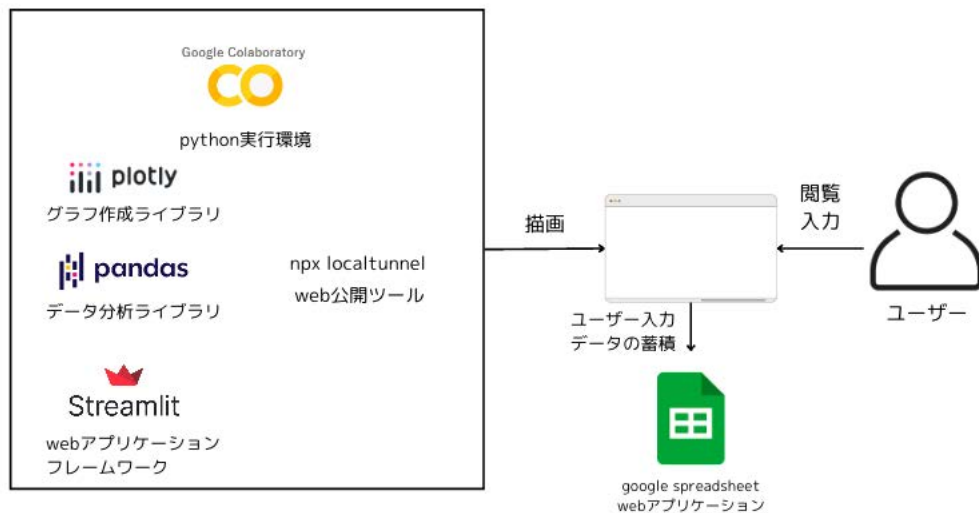


図 6 プロトタイプイメージ

言語は Python をベースとし、実行環境には Google Colaboratory を選択した。アプリのフレームワークとしては前述の理由から **Streamlit** を利用する。また、アプリの中でアンケートを実施してそのデータを集計する必要があったため **pandas** を、集計したグラフの作成には **plotly** を利

用した。更に、ウェブを限定公開する方法として `npx localtunnel` を用いた。ユーザーがウェブ上で入力したデータは `google spreadsheet` 上に蓄積されるようにした。

今後、アプリ内部のコンテンツをもう少し固めたり拡充したりする必要があるが、発達障害者へのマイクロアグレッションの再帰主題分析の結果を取り入れたアニメーション動画（図 7）なども取り入れ、要素技術としてはほとんど完成しており、概ね目標は達成していると言える。



図 7 発達障害者へのマイクロアグレッションの再帰主題分析を取り入れて作成したアニメーション

3-2-4. 項目 4：社会実装（予備的フェーズ）

R4 年度には、啓発活動として、プロジェクト用 SNS アカウントの開設、短編ドキュメンタリー（インタビュー動画）の撮影、3 種類の漫画の作成が完了した。短編ドキュメンタリーは、発達障害やトランスジェンダーをはじめとするマイノリティ当事者 4 名にインタビューを行い、不可視化されたマイノリティへのマイクロアグレッションを可視化することを目的とし、プロジェクトの YouTube アカウント上で公開している（<https://youtu.be/loTPiyyqUWA?si=uEtgLzTJGEeg9ZWK>）（図 8）。また、キックオフシンポジウム内でも上映し、「自分もマジョリティ側になってマイクロアグレッションを沢山してきたことに気づいた」「今まで不可視だった生きづら

さが可視化されて、それに気づくヒントを得られた」といった感想が寄せられた。3種類の漫画は、大人・子どもの発達障害者へのマイクロアグレッションや女性へのマイクロアグレッションなど言葉ではわかりにくい概念を可視化し、動画とは異なる媒体での啓発を行った。漫画の第1弾は15.2万件、第2段は60.9万件、第3段は6.7万件表示され、多くの対象者の目に触れたと言える（2024年3月現在）。



図8 短編ドキュメンタリー「Nothing about us without us」 #1

また、R5年にはスモールスタート期間の目標の一つであるオールマイノリティプロジェクトのキックオフシンポジウムを実施した（図9）。「マイノリティに対して、社会の認知や行動は変容するか？」をテーマにして、その社会の実現に向けて何が必要かを話し合った。専門家を招き、シンポジウムを行い、発達障害当事者のインタビュー動画も放映した。そのうえで、参加者とディスカッションも行った。本シンポジウムは対面・オンライン併せて1075名が参加した。事後アンケートの結果91%が内容に非常に満足～概ね満足との回答であった。



図9 キックオフシンポジウムを実施した会場

キックオフシンポジウムに加えて、共催のシンポジウムとして、SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム（シナリオ創出フェーズ）「発達障害の特性に関連する対処法を多様な脳特性に対応して自動提案する情報配信サービスの可能性検証」の代表研究者の佐々木銀河先生と一緒に、一般公開ウェブイベント「発達障害の“障害”はどこにあるのか？」を実施した（図10）。このオンラインイベントには3041名が参加した。その他、SNSのYouTubeのオールマイノリティプロジェクトチャンネルの視聴回数は2009回再生され、X（旧Twitter）のアカウント数は1338名となっている。



図10 共催シンポジウム「発達障害の“障害”は社会のどこにあるのか？」のポスター

3-3. プロジェクトのリサーチ・クエスチョンについて明らかになったこと

Q1. 本邦における発達障害者の社会的孤立・孤独の生成・維持システムはどのようなになっているのか？

(回答)

本邦における発達障害者の社会的孤立・孤独の生成・維持システムとしては、発達障害者が受ける社会からのマイクロアグレッションがあると、他者からの受容を受けることに負の影響があり、その他者からの受容がない結果、社会的孤立・孤独が増すという因果関係が明らかになった。今回の分析結果の一部は、我々の本調査の仮説である「マイクロアグレッションが、発達障害者の社会的受容体験を阻害し、その結果、社会的孤立・孤独に影響を与える」ということが立証された。R4年度は横断的なデータにより関係性を確認し、R5年度には課題であった因果関係の検討のために縦断データを取得して検討を行うことで、横断縦断的に発達障害者の社会的孤独の生成および維持が明らかとなった（図11）。

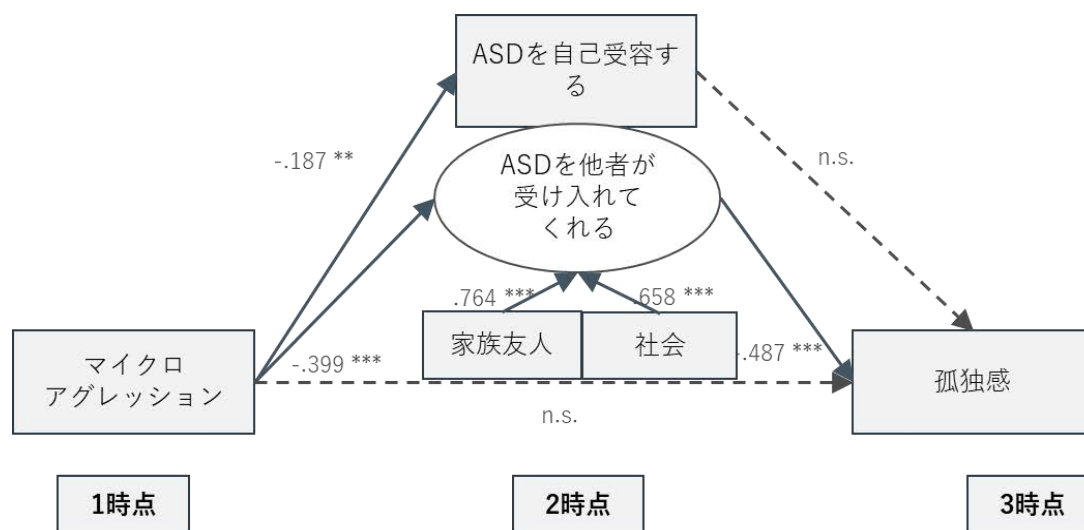


図11 自閉症者の社会的孤立・孤独の生成維持モデル

Q2. 発達障害（特に自閉スペクトラム症）当事者のマイクロアグレッションの体験の特徴は何か？

(回答)

- ① 障害に対するマイクロアグレッション尺度日本語版の開発を行った：Q1.で用いた無意識の差別を量的に測定する尺度として、能力主義的なマイクロアグレッションを測定する

尺度であるAbleist Microaggressions Impact Questionnaire (AMIQ ; Aydemir-Döke
ら, 2022) 日本語版を作成するために、尺度翻訳・バックトランスレーション・原著者
とのディスカッションを経て、日本語を定めた。そして、尺度の因子構造や信頼性・妥
当性の検討の検討を行い、原版と同様の因子構造、十分な信頼性と妥当性が確認されて
いる。

- ② 自閉スペクトラム症に対するマイクロアグレッションの質的研究を行った：我々は発達
障害者に対し、「発達障害者の孤立/孤独」「発達障害者の心の健康の問題」と、「発達
障害者のマイクロアグレッション（無意識の差別）」、「発達障害を受容された体
験」、「社会的カモフラージュの程度」等に関する無記名のアンケート調査を行った。
現在は質的研究法である再帰手段分析法を用いて解析を行っており、発達障害（特に
自閉スペクトラム症）当事者のマイクロアグレッションの体験として、「発達障害によ
る経験を否定する」「発達障害を持つ人に対して他と異なる扱いをする」「拔きん出た
能力を求められる」といったテーマが報告された。

**Q3. 本プロジェクトで開発する、発達障害者への支援者に向けたマイクロアグレッションを減
少させることを狙ったアプリである「オールマイノリティアプリ」の効果はあるのか？**

(回答)

本プロジェクトでは、機械学習グループと連携して、発達障害者の支援者向け心理教育ツ
ールとして、マイクロアグレッションへの気づきと行動変容を促す「オールマイノリティア
プリ」を開発する。現時点ではアプリの効果は明らかではないが、開発後に効果検証を行
う。

3-4. 今後の成果の活用・展開に向けた状況

本研究課題は、発達障害者を始めとするマイノリティが社会的孤立・孤独に陥らないための、
認知行動療法を使用した、発達障害者の支援者や家族へのマイクロアグレッションの軽減を可能
にする社会ネットワークづくりを目指す。対象者は、発達障害の当事者、発達障害者の支援者お

よび家族等、発達障害者の身近にいる人々である。本研究課題は、支援施設、教育機関、臨床心理学や精神医学の研究者、臨床心理士・公認心理師や精神科医などの臨床実践者、メンタルヘルス系のアプリ開発者、作家、漫画家、映画監督などの多様な施設・関与者が協働しており、今後の成果の活用や展開を見据えて準備を進めている。

スモールスタート期間では、定型発達者（マジョリティ）と発達障害者（マイノリティ）の価値観の差異および発達障害者の社会的孤立・孤独の生成維持メカニズムの解明、そしてマイクロアグレッションの分類モデルの作成、発達障害者の支援者に対して、マイクロアグレッション軽減を目指したプログラムの作成を行った。また、多様なチャンネル（SNS、シンポジウム、動画や漫画等）を活用してマイノリティへのマイクロアグレッションを可視化・意識化するための活動を行ってきた。

他に、「国際展開/若手人材活躍」促進のための取り組みとして、PIがスウェーデンのストックホルム大学に訪問し、今までに取り組んだ結果は発表して意見交換を行った。さらに、来年度の研究計画に関する議論を行い、研究実施の事前準備を整えた。

今後、本プロジェクトの成果が活用され、社会に展開していくために、まずは、発達障害をはじめとするマイノリティ属性によって周縁化され、孤立・孤独の生成維持メカニズムが関係者間で共有されることを目指す。そのために、支援者向けの研修会を実施している。加えて、本格研究期間では、支援者を対象にしたマイクロアグレッション体験の調査なども計画しており、本プロジェクトで得られた研究成果をプログラムにも組み込むなど、関係者間で共有されるための仕組みづくりを行っている。また、本格研究開発期間において、プログラムの効果検証をおこなった後に、支援施設での発達障害者の支援者に対するマイクロアグレッションを軽減プログラムの定着を目指している。そのために、すでに支援施設との関係を築き、効果検証の場を確保している。

また、本プロジェクトによって顕在化されたマイノリティへのマイクロアグレッションの認知が、プログラムの普及や啓発活動によりさらに広がり、当該の問題がより意識化がなされることを目指している。すでに啓発活動を通してマイノリティに対するマイクロアグレッションについて多くの人の目に触れているが、現在の啓発活動を継続し、さらに多くの人に届けることを予定している。また、一般向けへの啓発活動だけにとどまらず、学会等での発表も活発に行なってい

る。それにともない、マイノリティへのマイクロアグレッションについての心理学・精神医学での研究開発が深化すると考えられる。本プロジェクトの研究成果によって、支援者・家族のマイクロアグレッションが減り、将来的にはマジョリティの価値観にマイノリティの価値観が包摂され、発達障害者（マイノリティ者）の社会的孤立・孤独が生じにくくなる社会が実現されと考える。さらにオールマイノリティアプリの汎用性をすべてのマイノリティに使用できるように高めることにより、様々なマイノリティが社会の周縁から中心（マジョリティ）に参加可能になる持続可能な社会を目指す。

4. 研究開発の実施体制

4-1. 研究開発実施者

(1) 調査研究・認知行動療法グループ（リーダー氏名：大島 郁葉）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
大島 郁葉	オオシマ フミヨ	千葉大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	教授
高橋 史	タカハシ フミト	信州大学	教育学部	准教授
和田 真	ワダ マコ ト	国立障害者リハ ビリテーション センター	研究所 脳機能系障 害研究部	室長
井手 正和	イデ マサ カズ	国立障害者リハ ビリテーション センター	研究所 脳機能系障 害研究部	研究員
市川 樹	イチカワ イツキ	国立障害者リハ ビリテーション センター	研究所 脳機能系障 害研究部	流動研究員
清水 栄司	シミズ エ イジ	千葉大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	教授
本郷 美奈子	ホンゴウ ミナコ	千葉大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	特任研究員
田村 真樹	タムラ マ サキ	千葉大学大学院 医学研究院	認知行動生理学	特任研究員
高階 光梨	タカシナ ヒカリ	千葉大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	特任研究員
管 思清	カン シセ イ	千葉大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	特任研究員

(2) 機械学習グループ（リーダー氏名：国里 愛彦）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
国里 愛彦	クニサト ヨシヒコ	専修大学	人間科学部	教授
高橋 徹	タカハシ トオル	早稲田大学	人間科学学術院	助教

辻 拓将	ツジ タク マサ	帝京大学	医療技術学研究科	研究支援員
村中 誠司	ムラナカ セイジ	大阪大学	人間科学研究科	助教
竹林 由武	タケバヤシ ヨシタケ	福島県立医科大学	医学部	講師

(3) アプリ開発グループ（リーダー氏名：小川 晋一郎）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
小川 晋一郎	オガワ シ ンイチロウ	株式会社 Awarefy		代表取締役
秦 正顕	ハタ マサ アキ	株式会社 Awarefy	Awarefy 事業部	リーダー
池内 孝啓	イケウチ タ カヒロ	株式会社 Awarefy		取締役

(4) 社会実装グループ（リーダー氏名：土屋 賢治）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
土屋 賢治	ツチャ ケ ンジ	浜松医科大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	特任教授
加藤 健生	カトウ タ ケオ	浜松医科大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	特任研究員

(5) 啓発グループ（リーダー氏名：大島 郁葉）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
大島 郁葉	オオシマ フミヨ	千葉大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	教授
榎本 大貴	エノモト ダイキ	(株)LITALICO	クオリティマネジ メント統括部	統括部長
野口 晃菜	ノグチ ア キナ	一般社団法人 UNIVA		理事

4-2. 研究開発の協力者・関与者

氏 名	フリガナ	所 属	役 職 (身分)	協力内容
代田 剛嗣	シロタ タケシ	一般社団法人 みらいのいば しょ研究所	代表	アンケート調査への協力
日戸 由刈	ニット ユカリ	相模女子大学 人間社会科学 部	教授	オールマイノリティアプリ開発協 力
本田 秀夫	ホンダ ヒデ オ	信州大学医学 部	教授	オールマイノリティアプリ開発協 力
千葉県発達障 害者支援セン ター				オールマイノリティアプリの社会 実装協力
浦尾 悠子	ウラオ ユウ コ	千葉大学	特任講師	オールマイノリティアプリの社会 実装協力
中川 彰子	ナカガワ ア キコ	千葉大学	特任教授	オールマイノリティアプリの社会 実装協力
村上 元	ムラカミ ツ カサ	日本医療大学	講師	アンケート調査への協力
佐藤 寛朗	サトウ ヒロ アキ		フリーラ ンス	ドキュメンタリー制作
猪原 秀陽	イノハラ ヒ デハル		フリーラ ンス	心理教育漫画制作
浅沼 比奈子	アサヌマ ヒ ナコ		フリーラ ンス	イラスト制作

5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

5-1-1. 情報発信・アウトリーチを目的として主催したイベント（シンポジウムなど）

年月日	名 称	場 所	概要・反響など	参加人数
2023/04/23	オールマイノリティプロジェクト 公開シンポジウム 「マイノリティに対して、社会の認知や行動は変容するか？」	ハイブリッド (オンライン および専修大 学神田キャン パス)	【趣旨】本シンポジウムは「マイノリティに対して、社会の認知や行動は変容するか？」をテーマにして、その社会の実現に向けて何が必要かを話し合った。専門家を招き、シンポジウムを行い、発達障害当事者のインタビュー動画も放映した。そのうえで、参加者とディスカッションも行った。 【反響】1049名の申し込みがあり、事後アンケートの結果91%が内容に非常に満足～概ね満足との回答であった。	●申込者数 1,049名 ●オンデマンド視聴回数 合計 3,880回
2023/07/23	一般公開ウェブイベント「発達障害の“障害”は、社会のどこにあるのか？」(千葉大学ダボットプロジェクトとの共催)	オンライン	【趣旨】このイベントでは、発達障害の“障害”を社会の構造上で生じる社会的障壁として捉えます。マイクロアグレッションに関する基調講演、大学という社会の構造に関する当事者と支援者の模擬対話セッションをきっかけにしながら、その障壁は社会のどこにあるのか、青年期・成人期を中心に議論した。そして、マイノリティである発達障害のある人の社会的孤立・孤独を防ぐために、参加者の皆様からの事前アンケートやコメントをもとに、私たちが取り組めることについて議論した。	●申込者数 3041名

2023年度 RISTEX事業 公開シンポジウム
オールマイノリティプロジェクトシンポジウム

参加
無料

マイノリティに対して、 社会の認知や行動は 変容するか？

発達障害ではない普通の人々（マジョリティ）の常識や価値観に合わせていくことが、発達障害の人（マイノリティ）のあるべき姿なのでしょうか？無理に合わせてすることで、疲弊し、かえって孤立・孤独が高まるかもしれません。これからは、発達障害の人の好みや価値観に沿った形での適応とは何かについて、考えていくべきかもしれません。

本シンポジウムは「マイノリティに対して、社会の認知や行動は変容するか？」をテーマにして、その社会の実現に向けて何が必要かを話し合います。当日は専門家をお招きしてシンポジウムを行い、発達障害の人のインタビュー動画も御覧いただきます。そのうえで、皆様とディスカッションをしたいと思います。お気軽に参加ください。

日時 2023年 4月23日 [日] 13:00～16:00

会場 専修大学 神田キャンパス 10号館3階 10031教室（黒門ホール）
およびオンライン配信

対象 発達障害の支援関係者・当事者とご家族の方（先着100名まで）

開催形式 対面・オンライン（ハイブリッド）
対面：先着100名/オンライン：200名

参加費用 無料

主催・実施 千葉大学子どものこころの発達教育研究センター
「オールマイノリティプロジェクト：発達障害を始めとするマイノリティが社会的孤立・孤独に陥らない認知行動療法を用いた社会ネットワークづくり」研究班

シンポジウム

「マイノリティに対して、社会の認知や行動は変容するか？」

主催者：千葉大学子どものこころの発達教育研究センター教授 大島 郁葉



「生物学的変異は必ずしも病気や障害とは限らない
—自閉スペクトラムに対する社会的認知の変遷からの示唆—」

シンポジスト：信州大学医学部子どものこころの発達医学教室 教授 本田 秀夫



「マイノリティをマジョリティに合わせる教育からの脱却
—インクルーシブ教育の実現にむけて—」

シンポジスト：一般社団法人 UNIVA 理事 野口 晃菜



映像：マイノリティ当事者のインタビュー「Take us seriously」

参加申込はこちら

peatix 経由でお申し込みください。
<https://amp2023.peatix.com/>



※登録締切 対面：先着順で埋まり次第終了
オンライン：2023年4月23日 12:45



5-1-2. 研究開発の一環として実施したイベント（ワークショップなど）

- (1) 2023 年度 第 3 回 CBT×ASD 研修会 『自閉症者における社会的カモフラージュ』（通訳付き）Laura Hull 先生（University of Bristol）
日時：2023 年 9 月 29 日（金）18 時～20 時 30 分 オンラインワークショップ

5-1-3. 書籍、DVD など論文以外に発行したもの

- (1) YouTube での発達障害者のインタビュー動画の配信
<https://www.youtube.com/@ampJPN>

5-1-4. ウェブメディア開設・運営

- (1) サイト名：All Minorities Project、URL： <https://all-minorities.com/>、立ち上げ年月：2023 年 2 月、反響：立ち上げから 34 カ国、約 6500 名がサイトにアクセスしている（2024 年 3 月時点）
- (2) SNS アカウント：@AMP_JPN、URL： https://twitter.com/AMP_JPN、立ち上げ年月：2022 年 11 月、反響：フォロワーは 1498 名、過去 28 日で約 17000 回ツイートが閲覧されている（2024 年 3 月時点）

5-1-5. 学会以外（5-3. 参照）のシンポジウムなどでの招へい講演 など

- (1) 千葉大学子どものこころの発達教育研究センター主催 第 14 回 千葉県こどもの心教育医療研究会 「認知から迫る臨床支援の最前線」、「オールマイノリティプロジェクト：マイノリティが社会的孤立・孤独に陥らない認知行動療法を用いた社会的ネットワークづくり」、2022 年 10 月 5 日、千葉大学西千葉キャンパス
- (2) 千葉県発達障害者支援センターCAS 医療従事者向けセミナー、『青年期自閉スペクトラム症への心理評価および心理・社会的支援』、2022 年 10 月 21 日～2022 年 10 月 30 日、オンライン
- (3) 株式会社 voice and peace 講演会、発達障害と ACAT、スティグマ、ニューロダイバーシティに関して、2022 年 11 月 8 日、オンライン
- (4) 「みんな違って、みんないい！」～インクルーシブな社会の実現を目指して～さがみはら発達障害連続ウェブセミナー、「スティグマを超えて」、2023 年 2 月 18 日、オンライン
- (5) 習志野市 ひまわり発達相談センター 発達支援研修公開講座、「生きやすさを目指す」～自閉スペクトラム症の理解と支援～、2023 年 8 月 29 日、習志野市民ホール
- (6) クローバー・札幌ポプラ会・おがる共催研修 広めよう 発達障がい理解～自分のことを知るコツを学ぼう～、発達障がいのある成人当事者の自己理解、2023 年 9 月 2 日、オンライン

5-2. 論文発表

5-2-1. 査読付き（ 0 件）

該当なし

5-2-2. 査読なし（ 0 件）

該当なし

5-3. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

5-3-1. 招待講演（国内会議__2件、国際会議__0件）

- (1) 大島郁葉（千葉大学）、教育講演6 自閉スペクトラム症と不安の認知行動療法、第15回日本不安症学会学術大会
- (2) 大島郁葉（千葉大学）、神経発達症を科学するー最新知見のupdateー「児童思春期のASD児と保護者に対する認知行動療法「ASDに気づいてケアするCBT（ACAT）の開発と効果検証」」、第65回日本小児神経学会学術集会、岡山コンベンションセンター・岡山県医師会館、2023年5月27日、ハイブリッド開催、2023年5月19日ー2023年6月30日

5-3-2. 口頭発表（国内会議__4件、国際会議__0件）

- (1) 大島 郁葉（千葉大学）、千住 淳（浜松医科大学）、井手 正和（国立リハビリテーションセンター）、長井 志江（東京大学）、「自閉症基礎研究の当事者化:『中核症状の理解・改善』を超えて」、日本自閉症スペクトラム学会第 21 回研究大会、白百合女子大学、2023年8月20日
- (2) 管 思清（千葉大学）、田村 真樹（千葉大学大学院）・清水 佑輔（東京大学大学院、日本学術振興会）、指定討論者：野口 晃菜（一般社団法人UNIVA）、大島郁葉（千葉大学）、マイクロアグレッション・スティグマ・社会的カモフラージュの壁を越える：自閉症者を含むマイノリティにおける社会的孤立・孤独から解放するための理解への架け橋ー社会心理学・臨床心理学・精神医学・障害科学の観点からー、日本心理学会第87回大会、神戸国際会議場・神戸国際展示場、2023年9月16日
- (3) 岩佐 和典（大阪公立大学）、田中 恒彦（新潟大学）、下山 真衣（信州大学）、大島 郁葉（千葉大学）、熊谷 晋一郎（東京大学）、神経発達症へのメンタルヘルスの向上のための心理的支援：神経多様性に基づく認知行動療法について考える、日本認知・行動療法学会第49回大会自主シンポジウム、北海道大学 学術交流会館・TKP札幌駅カンファレンスセンター、オンデマンド
- (4) 企画代表者：高階 光梨（千葉大学）、話題提供者：高階 光梨（千葉大学）、佐々木 銀河（筑波大学）、津田 菜摘（同志社大学）、指定討論：大島 郁葉（千葉大学）、司会：高橋 史（信州大学）、マイノリティへのマイクロアグレッションと認知行動療法、日本認知・行動療法学会第49回大会自主シンポジウム、北海道大学 学術交流会館・TKP札幌駅カンファレンスセンター、2023年10月9日

5-3-3. ポスター発表（国内会議__0件、国際会議__1件）

- (1) Masaki Tamura, Fumiyo Oshima, Mikuko Seto, Daiki Enomoto Minako Hongo, Eiji Shimizu, Impact of Autism-Related Stigma on Social Camouflaging: a cross-cultural study、国際自閉症学会（International Society for Autism Research: INSAR）2023、Stockholm、2023年5月3日ー2023年5月6日

5-4. 新聞/TV 報道・投稿、受賞など

5-4-1. 新聞/TV 報道・投稿

該当なし

5-4-2. 受賞

該当なし

5-4-3. その他

- (1) LITALICO 発達ナビ、2023 年 3 月 23 日、公開シンポジウム 「マイノリティに対して、社会の認知や行動は変容するか？」 2023 年 4 月 23 日（日）開催——「オールマイノリティプロジェクト」（千葉大学大島郁葉先生代表）主催の注目イベント、URL : https://h-navi.jp/column/article/35029270#headline_219187

5-5. 特許出願

5-5-1. 国内出願（_____件）

該当なし

5-5-2. 海外出願（_____件）

該当なし

6. その他（任意）

該当なし